

「グディー・ブレイクとハリー・ギル」と『リア王』

——ワーズワスとシェイクスピアによる寒さの表象

熊 倉 麻 名

1. 序

ロングマン版『抒情民謡集』(*Lyrical Ballads*)の編者マイケル・メイソン(Michael Mason)は、ワーズワス(William Wordsworth)の「グディー・ブレイクとハリー・ギル」(“Goody Blake and Harry Gill”)で描かれているハリーを襲った寒さと、シェイクスピア(William Shakespeare)の『リア王』(*King Lear*)の中でエドガー(Edgar)が「哀れなトムは寒い」(3.4.143)¹と言う時の寒さを比較する必要性を指摘している(107)。これらの寒さは、老婆グディー・ブレイクが貧しさゆえに苦しめられた自然の厳しい寒さや、嵐の荒野でリアが貧しき者たちに思いをはせながら経験する雨風による寒さとは異なる。人生における悲嘆と後悔、自然や神への畏怖の念によって心が震わされる時に感じる超自然的寒さである。

本稿では、異なる自然観を持つワーズワスとシェイクスピアが、いかに自然現象としてとしての寒さと超自然的寒さの相違を描き、さらにそれぞれの寒さが登場人物にどのような影響を与えるかを考察する。

2. ワーズワスの自然と寒さ

1760年代に英国で始まった産業革命以降、社会の近代化が進み科学技術が発達した。かつて人間は自然の恩恵に感謝しながら自然と共に生きてきたが、自然を科学技術の発展と結びつけることによって、次第に自然への敬畏や自然の中での人間らしい生活を忘れていった。しかしながらワーズ

ワス、ブレイク (William Blake)、キーツ (John Keats) などのロマン主義詩人は、あくまで自然を人間の内面と結びつけて人と人の繋がりや相互理解を追及し、科学の探求と人間の内的生活を完全に分断した (Maxwell 3)。『抒情民謡集』の「序論」(Preface 1802) で「詩は人間と自然のイメージである」(73) と書いているように、ワーズワスは自然と人間の相互関係を詩作のテーマとした (Wyatt 128)。

「グディー・ブレイクとハリー・ギル」で描かれているドーセットシャー (Dorsetshire)² の人々も自然の恩恵によって生活している。

若いハリーは元気な家畜商
 誰が彼ほど丈夫な体を持っていようか？
 彼の頬はクローバーのように赤く、
 彼の声は3人分の大きな声。
 グディー・ブレイク婆さんは年寄りで貧しい、
 十分食べられず、薄着でいる。
 彼女の戸口を通る者は
 その小屋がどんなに貧しいか見て取れる。(ll. 17-24)

誰よりも頑強な肉体を持った若者ハリーは、育てた家畜を売って比較的裕福な暮らしをしている。語り手は、1つの連の中でハリーとグディー・ブレイクの生活状況と健康状態を対照的に描写することによって、読み手を老婆の境遇に対する同情へと導く。グディー・ブレイクは「貧しい住処で1日中糸を紡ぐ」(l. 25) が、それでは十分ではないので、老いた体に鞭打って「夜も3時間働く」(l. 26)。しかしその稼ぎは「ろうそく代にもならない」(l. 28)。語り手は「ああ！話すのもかわいそう」(l. 27) と、老婆に対する感情を明確に示している。「哀れなグディー・ブレイク」(l. 88) の羊毛の糸紡ぎの内職は、18世紀の貧しい家内工業における長時間労働と低所得を象徴する (Mason 104)。³ 食べる物も着る物も満足に持たない老婆は、貧者の中でも最も底辺で生きる、社会のひずみの被害者である。

彼女を最も苦しめるのは厳しい冬の寒さである。自然は非情にも寒さを

凌ぐすべを持たない老婆にも容赦ない冬を与える。

しかし川がその流れを凍らせる頃には
ああ！ そうすると彼女の年老いた骨は震えたことだろう
その時もし彼女に会ったなら、あなたも言ったことだろう、
グディー・ブレイクにとって辛い時だったのだ
彼女の夜は暗く不毛で、
あなたが考えるように、かわいそうなことだが、
ベッドに入るにも寒すぎたのだ、
眠るために目を閉じようにも寒すぎたのだ。(II. 41-8)

語り手は「あなた」(I. 43. 46)と語りかけることによって読み手の共感を促し、「かわいそうなことだが」(I. 46)と老婆に対する憐憫の情を示している。「ルーシー・グレイ」(“Lucy Gray”)において自然が子供の命を奪ったように、相手が無垢の存在であっても自然が常に助けの手を人間に差し伸べるわけではない。人間は自分自身の力で試練を乗り越えなければならず、それゆえワーズワスは自然の中で暮らす人々が助け合い、支え合う、人間らしい心に注目している。老婆に示された自然の慈悲は「陽が長く暖かくて明るい夏の日々」(I. 38)や「冬の夜に吹く強い風によって木々からふり落とされる木片や朽ちた枝木の集まり」(II. 49-52)である。「彼女を知っている人はみな言っている、元気で病気で、木でも小枝でも、3日分も前もって集めることは無かった」(II. 54-6)とあるように、グディー・ブレイクは遠慮深く手に持てる1-2日分だけ持ち帰る。冬に凍った川を「私たちの川」(I. 41)と呼ぶ語り手は、彼女の暮らしを近くで見守っている人物であり、老婆が他人の迷惑にならないように、慎ましく暮らしているさまを読み手に伝えている。

ワーズワスは「カンバーランドの老人の乞食」(“The Old Cumberland Beggar”)と「放浪する女」(“The Female Vagrant”)で、「周辺の自然とのハーモニーの中で生きる」(McKusick 25) 貧しい人々が自分を犠牲にしながらも、より貧しい弱者に施しを与え静かに見守る様子を描いている。「グ

ディー・ブレイクとハリー・ギル」では、ドーセットシャーの人々は老婆に直接救いの手を差し伸べてはいないが、寒さに震える彼女が燃料としてハリーの生垣の枝を摘み取る行為を弾劾すべき罪とは捉えていない。⁴ これは語り手が老婆には憐れみを示し、ハリーの仕打ちを批判的に語ることによって示される。「彼は叫びながら突進し、可愛そうなグディー・ブレイクに飛びかかった」(ll. 87-8)。語り手は老婆を見逃すことのできないハリーが、「激しく彼女の腕をつかみ、」(l. 89)「激しく彼女の腕を振って、『ついにお前を捕まえたぞ』と叫んだ」(l. 91-2) 無慈悲さを非難している。彼は自然の恵みによって家畜を育てて生活していながら、自然によって自分が生かされていることを忘れ、優しさや同情心を失い、ワーズワスの理想の人間像「自然の子供」⁵ からかけ離れている。ワーズワスが追い求める「聖なる優しさ、同情心、善なるものを求め、存在が見えない霊的な存在を感じ取ることができる自然と一体になった人々」(Bate 77) とハリーは対極に位置する。

ハリーは、グディー・ブレイクを捕まえるために「しばしば暖かな火から離れて出かけた」(l. 69) が、暖かな家で石炭が燃えていればこそ、雪降る凍てつく道を牧草地へ向かい、垣根の陰で見張りを続けることが出来たのである。高価な石炭⁶ の恩恵による暖かな生活が彼の心を冷徹にし、「彼は彼女に思い知らせてやろうとした」(l. 68)。「思い知らせる」(“vengeance” l. 68) という言葉は聖書の次の一節を想起させる。「愛する人たち、自分で復讐せず神の怒りに任せなさい、復讐するは我にあり、我これを報いんと主は言われた。」(ローマ人への手紙 12: 19) 貧しい者の小さな罪を自ら裁こうとするハリーの慢心は、神への畏れを忘れた彼自身の罪を暗示している。「審判」(l. 96) を受けたのは、グディー・ブレイクではなくハリーだったのである。

エラズマス・ダーウィン (Erasmus Darwin) はグディー・ブレイクを「魔女のような老婆」(385) と表現しているが、ワーズワスは彼女の「神よ！ 望みをかなえてくださる方、彼がもう二度と暖かくなりませんように！」

(II. 99-100) という言葉を信心深い老婆の神への祈願として描いている。⁷ 枝の上に膝をついた老婆の姿は祈りの際に教会の膝布団にひざまずく習慣と重ねあわされており、祈りの言葉には聖書の詩編の一節が投影されている (Mason 106-7)。「神はご自分を呼び求めるすべての者、ご自分を真実に呼び求めるすべての者の近くにおられます。ご自分を恐れる者たちの願いを遂げてくださり、助けを求めるその叫びを聞き彼らを救ってくださいます」(詩編 145, 18-9)。ワーズワスは、神も自然も畏れないハリーの姿を超自然的寒さに襲われた原因として描きだしたのである。

おお! どうしたことが? どうしたことなのか?
若いハリー・ギルはどうしたというのか?
彼の歯は絶えずガチガチ
ガチガチ、ガチガチ、まだガチガチ (II. 1-4)

ハリーの寒さに対する強烈な驚きを表現するために、「おお!」という感嘆詞と「どうしたことが?」という問いの繰り返しから始まる第1連は、寒さの異常さと超自然の力への畏怖を強調する。ワーズワスは、全16連中“chatter”を10回、“cold”を9回使い、さらに“chill, frost, shake, snow, icy”という単語によって凍てつく寒さを強調している。ビーティ (Arthur Beatty) は、語句や文体を効果的に使うことによって強烈な印象を与える第1、2連を創作したワーズワスを「感覚に訴えることに熟達した詩人」(291)と評している。巧みな言葉の選択と繰り返して読み手の聴覚に訴えかけることによって、詩人はハリーの寒さを読み手にも感じさせようとする。

超自然的寒さはハリーの肉体だけでなく人格にも変化を及ぼす。かつては3人分の大きな声で話していたハリーが今は、「誰にも一言も話さなくなった」(I. 121)。ただひとりごとのように「あわれなハリー・ギルはとても寒い。」(I. 128)とつぶやくばかりとなったのである。グディー・ブレイクの寒さは彼女の命も奪いかねなかったが、ハリーの寒さは直接彼の命を奪うような性質のものではなく、物質的には相変わらず裕福であり何も失っ

ていない。しかしながら一方で、永遠に続く超自然的寒さはハリー・ギルのすべて、つまり人生そのものを奪ったと言える。「血気盛んだった若者は陰気になり、心は悲しみでいっぱいになった」(l. 107)の“sorrow”(l. 107)は悲しみ以外に後悔という意味があり、ハリーの悔恨の情を表している。乗馬用コートを次々に取り寄せても暖められない寒さが永遠のものであると悟った時、彼は全能であるかのように感じていた自分の無力さを思い知ったのである。

ダンビー (John F. Danby) が指摘するように、ワーズワスは自然と人間らしさについて詩作を行ったのである (127)。自然を忘れた近代社会の生活様式や思考の中で生きる尊大な人間の姿は、ロマン主義の理想とする人間像とは相反する。ロマン主義の崇高概念は人間の想像力を称揚するが、それは人間の卑小と狭量という認識と謙虚さの必要を訴え、人間は唯我独尊の存在ではないことを示している (Bate 6)。ワーズワスは超自然的寒さによって、人間の存在の小ささと自然の偉大さを対照させたのである。

3. シェイクスピアの自然と寒さ

エリザベス朝の自然の定義は科学、哲学、神学が絡み合って複雑である。シュミット (Charles B. Schmitt) は、天文学、数学、地学などの発展により、自然は膨大で人間の知識はわずかでしかないことが明らかになり、自然とは神が目的をもって行う動きであると考えられるようになったと指摘している (244-5)。人間社会は自然によって支配されており、人間は神の意志に基づく不変の掟である自然の法に従わなくてはならない (Knowlton 723) と考えたのである。バイコン (Francis Bacon) は、自然とは何も実在しない状態であり、自然の法によって行われる純粋な行為が存在するのみであるという見解を示した (Vickers 335)。道徳哲学においては、キリスト教徒と異教徒の認識には差があり、前者は神に従い後者は自然に従うとも考えられていたが、共通の認識としては、自然は神との繋がりにおいて認識され、自然の法は神の法と同等と認識されていた (Schmitt 323-4)。

『リア王』では、リアとグロスター (Earl of Gloucester) の自然の法に反する行いによって、それぞれの子供達を巻き込む混乱が悲劇を生む。リアの王国分割が自然の法に反していることは明白である (Elton 78)。分割された国の間で争いが起こることは必然であり、実際ゴネリル (Goneril) とリーガン (Regan) の2人の娘の間で争いが始まる。現実社会においても、王国分割は英国王 James I 世による王位の長子相続という考え方と相容れないものであった (Elton 79)。リアの臣下であるグロスター伯爵の、人間の本能に任せた自然の法に逆らう行いによって生まれたエドモンド (Edmund) は庶子の境遇に不満を抱え、自然の法を犯しても嫡子である兄エドガー (Edgar) の権利を奪い取ろうとする。父暗殺未遂のという無実の罪を着せられて逃走するエドガーは、嘆き悲しむ父に荒野で出会うが名乗ることも出来ない。天と地に存在するすべてのものが「存在の大きい鎖」によって繋がっている (Lovejoy 50-1) と考えていたエリザベス朝では、ひとたび自然の秩序に反することが起きますと、それが悪循環となって天と地の間のあらゆるものに影響を与えると信じられていた。

『リア王』第2幕では、嵐の中をさまようことを強いられたリアに寒さが追い打ちをかける。グロスターは「ああ、夜がやってくる、冷たい風が痛いほどに吹きすさぶ、このあたりはどこまで行っても灌木もない」(2. 2. 490-92) とリアの身を案じる。一方、賢臣ケント (Kent) は「私はもう一度あの冷たい城に行ってみましょう、もっともそれを築いた石よりも冷たい空気が場内に立ちこめている」(3. 2. 63-4) と、ゴネリルとリーガンの仕打ちが生み出す冷たい空気に言及する。リアは、きちがいトムとして荒野をさまようエドガーに「どうした、寒いのか？ 私自身寒いのだ」(3. 2. 68-9) と言うが、2人が感じている寒さは、信じる者に裏切られ、地位や名誉を奪われ、これまで生きてきた世界から嵐の荒野へと追い立てられた悲しみと絶望に由来する心の震えである。リアは自然の寒さと凍える心の寒さの両方に襲われ、この経験によって内省へと導かれる。

着るものもない貧しい者たち、どこにしようと
 この無慈悲な嵐に叩きのめされ、
 頭に何もかぶらず、おなかをすかせて、
 縫い合わせた穴だらけのぼろ布で、どうやって
 このような季節から身を守るのだろうか？ (3. 4. 28-32)

リアは貧者に対して無慈悲だった自分を知り、「ああ、私は今まであまりにも気に掛けなさすぎたのだ。」(3. 4. 32-3) と悔いる。驕れる者も彼らの貧しさを肌で感じることで、「余っているものを貧しい者たちに分け与え」(3. 4. 35)、「天の正義」(3. 4. 36)、すなわちキリスト教におけるカリタス(愛・慈善の行為) (Foakes 273)⁸ を行うべきだと考える。

リアは自然の寒さと心の苦痛に由来する寒さを比較する。「おれはこの嵐のおかげで心が紛れ、いろいろなことを思い出さずにいられるのだ、それがなければこの程度の苦痛では済まされまい」(3. 4. 24-5)。荒野で知った自然の寒さが心の苦痛を紛らせると述べている。ケントが嵐を避けるために掘立て小屋に入るようリアを諭した際にも、リアは雨にぬれることは何でもないと言う。

お前には大事に思われるらしいな、
 この激しい嵐が肌を濡らすことが、どうやらそうらしい、
 だが大病に襲われ、不治と極まれる身には、
 小病はさして苦にならぬものだ (3. 4. 6-9)

自然現象としての冷たさや寒さはリアにとっては小病であり、心の中に吹き荒れる嵐による内面の寒さこそが不治の大病である。超自然的寒さが永遠に続くことを認識したハリー・ギルが絶望によって言葉さえ失ったように、不治の大病である心の嵐によってリアは狂い始める。

4. 衣装による表象

2つの作品には衣装の問題が含まれている。衣装には体を守る、飾ると

いう目的がある一方、邪魔な物、見せかけという負の表象もあり、その意味は一貫していない (Heilman 25-6)。自然の中で生きる人間の肉体を覆い、寒さや危険から守るものとして生まれ、富や地位を表し、祭礼や儀式での役割を担い発展した衣装であるが、心を震わす超自然的寒さの前ではどのような衣装も無力であることをワーズワスとシェイクスピアは表している。

『リア王』において、追っ手から逃れて生きのびるために衣装を捨て「あわれなトム」(2. 3. 191, 3. 4. 37-8) となったエドガーは、「トムは寒いよう」(3. 4. 57, 81) と繰り返す。彼の感じている寒さは、信じる人間に陥れられ、父殺しの汚名を着せられ、自分の居場所を奪われた心の痛みに由来する。愛する息子に謀殺されそうになったと信じる父、目をくり抜かれ自殺しようとする父を目の当たりにしたエドガーは、凍える心で「寒い」(3. 4. 143, 169) と繰り返す。アーデン版 (Arden)、RSC 版 (Royal Shakespeare Company)、『リバーサイド・シェイクスピア』(*The Riverside Shakespeare*) の編者たちはエドガーの “O do, de, do, de, do, de” (3. 4. 57)、“Do, de, de, de.” (3. 6. 71) という台詞は、寒さで歯が震えて出た音と解釈している。音による寒さの強調は、ワーズワスがハリーの寒さを 10 回の「ガチガチ」“chatter” で表した手法と同様である。

カンター (Paul A Cantor) は、リアから「あわれな裸の二股の動物」(3. 4. 105-6) と呼ばれたエドガーは無垢な存在であり、自然の状態にある彼こそが真の人間の象徴であると指摘している (241)。腰にぼろ布を巻いた姿にはイエス・キリストのイメージが付されている (Elton 82)。エドガーは、自然の法を犯した父と弟の罪を背負った生贄の羊である。だが、絶望の中で「もって生まれた生身を剥き出しに、雨風の挑戦に立ち向かうのだ」(2. 2. 1823) と決心し、彼はリアと同様に嵐の中で自己を内省する。「自分ほど偉い者は無いと、すっかり良い気にさせられ、五寸足らずの橋を渡るのに葦毛の駿馬を突っ走らせる、己の影を謀反人と思い込んで、ぐるぐる追い回す、全く散々な目に遭った」(3. 4. 54-6)。狂気を装っているがエド

ガーは正気であり、伯爵の嫡子としての驕り、幸福であるが故の無知によって足元をすくわれたことを悔いる。衣装を捨てて、地位や名誉、後ろ盾がなくともひとりの人間として生きる強さを得たエドガーは、素性を隠して王や父に寄り添い、王国の秩序の回復に力を尽すこととなる。

衣装は無であることを主張し、「贅沢な衣装にうつつをぬかすな」(3. 4. 80)と言うエドガーに、リアは「墓の中にいた方がまだ楽だろう、裸の生身をそのように厳しい寒空にさらすよりは」(3. 4. 99-100)と答える。一度は生身の人間の中に真実を発見し、豪華な王の装束を引き裂いて脱ごうとするリアであったが(3. 4. 107)、彼の精神の安定に衣装は欠かせないものであった。彼が狂気から覚めたのは、最愛の末娘コーディリア(Cordelia)によって用意された新しい王の衣装に気づいた時である。彼は正気に戻って娘に詫びて許しを請うが、娘の愛情、王としての地位と名誉を示す衣装がリアには必要だったのである。

ワーズワスは「グディー・ブレイクとハリー・ギル」の2人を衣装によって対比している。グディー・ブレイクは「着るものもあまりなかった」(l. 22)が、ハリーは「チョッキ」(l. 5)、「良いグレイのダッフル」(l. 6)、「良質のフランネル」(l. 6)、「コート」(l. 8)、「乗馬用コート」(l. 109)、「毛布」(l. 7)を有する。これらの衣装は、ハリーの豊かさに支えられた暖かなくらしを象徴するが、心の震えに由来する「氷のような寒さ」(l. 104)はこれらすべてを一瞬にして無力化した。すっかり変り果て、ベッドの上で話すことも出来ない状態となり、「毛布が彼の周りに巻かれた」(l. 114)。「毛布」「blanket」(l. 114)には心を覆うものという意味があり、「巻かれた」「pinned」(l. 114)には罪・責任を負わせるという意味がある。つまり心を覆う寒さが、彼の行為に対する責任をハリー自身に負わせたのである。

5. 結論

自然観が異なるワーズワスとシェイクスピアであるが、「ハリー・ギルとグディー・ブレイク」、『リア王』において心の震えに由来する寒さを描き、

人間の無力さと自然の偉大さを示した。この寒さは、文明の象徴である火や衣装によって暖められることはない超自然的寒さである。シェイクスピアにとって寒さは、神からのメッセージであり社会の混乱の前兆を伝える警告である。超自然的寒さが何ものかを理解したとき、リアとエドガーは内省の時を持つ。エドガーは自然の姿に戻ることによって人間らしい強さと優しさを得るが、リアはコーディリアの死によって悲劇の最期を遂げ、ひとたび自然の秩序が乱された社会は容易には正されないことが描きだされている。エドガーのように苦難に耐え、神の真意を理解して自然の秩序を守るために生きる者だけに未来が与えられる。

リア、エドガーと異なり、ハリーは悔恨の情を言葉で表していないが、彼が自分自身を「哀れなハリー」(l. 124)と呼ぶとき“poor”には浅ましい、卑しいという自分自身を悔いる含意が込められている。エドガーが「哀れなトムは寒い」(3. 4. 152)と言う時に自分自身を悔いたように、「哀れなハリーは寒い」(l. 124)とつぶやくハリーの言葉にも内省が表されている。「ハリー・ギルとグディー・ブレイク」の語り手は「私はグディー・ブレイクとハリーのために祈る」(ll. 127-8)と締めくくり、2人が自然の寒さと超自然的寒さから解放されることを望んでいる。ダンビーが指摘するように、ワーズワスは人間についての代弁者である詩人として偉大なルネサンスの伝統に従い(17)、人間が自分自身を自然や神を凌駕する存在であるように考え、驕りによって慈悲を忘れたときに起る超自然的現象を表すことによって、自然の偉大さ人間の卑小さを示したのである。

注

- 1 『リア王』の引用はアーデン版第3版による。
- 2 ワーズワスはウォーリックシャー (Warwickshire) で起きた出来事を自分が良く知るドーセットシャーに置き換えている (Mary Moorman 284)。
- 3 Mason からの引用は、ロングマン版 *Lyrical Ballads* の注釈による。テキストのページ数を表示した。
- 4 貧しい者が暖を取る手段として他人の垣根の枝を多少拝借することがこの地方では伝統的に見逃されることであったのか、それとも犯罪行為とみなされたのかは明確ではない (Mason 106)。

5 Wordsworth, *Descriptive Sketches*, “Nature” 521.

6 ドーセトシャーでは輸送費がかさむため特に石炭が高価だった。(Mason 104)

7 「グデイー・ブレイクとハリー・ギル」は副題が「本当の話」(“A True Story”)であるように、新聞にも掲載された実際に起きた出来事に基づいた作品である。ワーズワスは、医師のダーウィンがこの不思議な出来事を精神医学的見地から検証した『ズーノミア』(*Zoonomia*)を読むことによって想像力を刺激された。ジェイムズ・アブリン(James H. Averill)は、ダーウィンは寒さに憑依された男の狂気に注目し、一方ワーズワスはこの詩において、人間の理性さえ奪ってしまう自然の力の偉大さを描き出したと指摘している(155)。

8 Foakes からの引用は、Arden 版 *King Lear* の注釈による。テキストのページ数を表示した。

引用文献

- Averill, James H. *Wordsworth and the Poetry of Human Suffering*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1980.
- Bate, Jonathan. *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*. New York: Routledge, 1991.
- Beatty, Arthur. *William Wordsworth: His Doctrine and Art in Their Historical Relations*. New York: AMS Press Inc., 1927.
- Cantor, Paul A. “Nature and Justice in *King Lear*.” *King Lear New Critical Essays*. Ed. Jeffrey Kahn. New York: Routledge, 2008.
- Danby, John F. *The Simple Wordsworth: Studies in the Poems 1797–1807*. London: Routledge & Kegan Paul, 1960.
- Elton, William R. *King Lear and the Gods*. Lexington: The University Press of Kentucky, 1988.
- Heilman, Robert Bechtold. *This Great Stage: Image and Structure in King Lear*. Washington: University of Washington Press, 1963.
- Knowlton, Edgar C. “Nature and Shakespeare.” *PMLA* 51 (1936): 719–44.
- Lovejoy, Arthur O. *The Great Chain of Being: A Study of the History of and Idea*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1936.
- Maxwell, Nicholas. *From Knowledge to Wisdom*. Oxford: Basil Blackwell, 1984.
- McKusick, James C. *Green Writing: Romanticism and Ecology*. London: Macmillan, 2000.
- Moorman, Mary. *William Wordsworth: The Early Years, 1770–1803 — A Biography*. Oxford: Oxford UP, 1957.
- Shakespeare, William. *King Lear*. The Arden Shakespeare 3rd ed. Ed. R. A. Foakes. London: Thomson Learning, 2004.
- . *The Riverside Shakespeare*. 2nd edition. Ed. Evans, G. Blackmore. Boston: Houghton Mifflin Company, 1997.

- . *The RSC Shakespeare: William Shakespeare Complete Works*. Eds. Jonathan Bate and Eric Rasmussen. Hampshire: Macmillan, 2007.
- Schmitt, Charles B. and Quentin Skinner, eds. *The Cambridge History of Renaissance Philosophy*. Cambridge: Cambridge UP, 1988.
- Vickers, Brian., ed. *Occult and Scientific Mentalities in the Renaissance*. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- Wordsworth, William and Samuel Taylor Coleridge. *Lyrical Ballads*. 2nd edition. Ed. Michael Mason. London: Pearson Longman, 2007.
- Wyatt, John. *Wordsworth and the Geologists*. Cambridge: Cambridge UP, 1995.